

☒ 話すこと ☒ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☒ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

個に応じた指導の充実と、AIとの対話を通じた即興的な言語活動への往還

実証概要

<校数>6校(高等学校) <人数>924名

<学年>第1、2学年 <アプリ等> GELP(株式会社ベネッセコーポレーション)、LANGX(株式会社エキュメノポリス)

<AI機能について>

・GELP:生徒一人ひとりの習熟度に応じた4技能の個別最適なトレーニングを提供し、発音・リズム等の即時フィードバックによる自律的な音読学習を促すとともに、学習管理機能を通じて定着度が把握できる。

・LANGX:AIとの即時的かつ双方向性のある対話練習により、実際の会話場面を想定した「話すこと[やり取り]」のトレーニングを実現する。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●家庭学習と授業の往還による言語活動の質的向上 (GELP)

家庭学習でAIによる音読練習を習慣化させ、教師が学習ログから定着度を把握して授業での重点指導に繋げる「指導サイクル」を確立した。これにより知識伝達の時間を削減し、即興的な意見交換といった対人での言語活動の充実を実現した。また、教師自らがAIを活用する「学習者のモデル」を提示することで、AI活用の動機付けを高め、自己調整学習能力の育成と発信力を中心とした英語力の伸長を実現した。

●パフォーマンステストに向けた個別最適な支援と対話力の向上 (LANGX)

パフォーマンステストに向け、AIとの対話練習を「事前練習」として活用し、即興的なやり取りの機会を拡充した。教師は、頻出表現を整理したワークシートの配付や、AI音声付き自作ウェブサイト(Google Site)により、個別の習熟に応じた学習環境の整備を行い、生徒が自分のペースで発音や表現の定着を図れるよう支援した。教師による適切な学習順序の設計と丁寧な見取りにより、生徒の自信と発話量を引き出し、スピーキングおよびリスニング領域の伸長を実現した。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

<A2レベル以上>

・4技能:40.2%→49.3%

・話すこと:48.4%→48.0%

・書くこと:41.3%→57.9%

教師が対話練習で得た表現を記述活動へ繋げるなど、領域間を横断する「指導サイクル」を確立したことが、発信技能全体の質的向上と底上げに寄与した。

②児童生徒の関心・意欲の変化

AIによる対面練習時を上回る心理的安全性の確保(約59%が「リラックスできた」と回答)を土台とし、教師がその成功体験をワークシート等で対面での言語活動へ繋げる設計を構築した。AIと教師の役割分担が、言語活動への前向きな意欲を効果的に引き出した。

③教師の指導の変化

AIを効果的に活用するために、「バックワードデザインで単元計画をしている」との回答:10%→60%
AIが個別練習を担うことで生じた時間を対面での言語活動に充て、「個に応じた指導」を行うなど、教師の役割が高度化・専門化する転換が見られた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●AI活用の最適化に向けたリーダー養成と、県内への指導モデルの波及

・単元内でのAI活用場面を具体化する研修を推進し、ゴールから逆算して活用を戦略的に検討する教員の増加につなげた。全モデル校での公開授業等を通じ、基礎練習はAI、対話の準備や支援は教師が担うなど、生徒の実態に即した柔軟で最適な役割分担モデルを確立した。

・活用状況の異なる県内教員に対して、動画等を用いて多面的な活用場面を提示することで、心理的障壁を払拭し普及を図った。参加者からは「自校の実態に即した活用イメージを持てた」との評価を得るなど、県内全域でAIを組み込んだ指導の個別化に対する理解が広がった。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●新たな指導法の探究が生む生徒の変容と、教員の学びを広げる共有体制の構築

<成果> AI活用を通じ教員が新たな指導法を共に探究する機会が創出された。活用場面の精選により、生徒が自信を持って話す姿勢や、まとめた内容を発表する発信力の伸長といった成果が確認された。県外視察も自校の実践を客観的に捉え直す貴重な示唆となった。

<課題> 単元計画の作成や活用効果の差が課題である。今後は優良指導案をアーカイブ化し県内で共有する。また、研修参加者の固定化に対して、グループウェア等を活用して学びの機会を拡充し、各校の実態に即した授業改善を広範に推進する。